





埴谷雄高作品集

外国文学論文集

5

河出書房新社

埴谷雄高作品集5 ©1972

一九七二年五月一〇日印刷 一九七二年五月一五日発行

定価——一二〇〇円

著者——埴谷雄高

装画——駒井哲郎 装本——杉浦康平

発行者——中島隆之

発行所——株式会社河出書房新社 東京都千代田区神田小川町三—六 電話 東京 二九二—三七一 振替 東京 一〇八〇二

印刷者——守安 巖 印刷所——東京印刷株式会社

製版印刷——凸版印刷株式会社

製本所——小高製本工業株式会社 0395—136005—0961





外国文学論文集

目次

|       |                  |
|-------|------------------|
| 7—9   | 序詞——隕石           |
| 10—23 | ドストエフスキイと私       |
| 24—33 | ポオについて           |
| 34—47 | サドについて           |
| 48—53 | ドストエフスキイの方法      |
| 54—66 | ドストエフスキイの位置      |
| 67—74 | ドストエフスキイに於ける生の意味 |
| 75—84 | ドストエフスキイの二元性     |
| 85—87 | 三冊の本と三人の人物       |

88—90 一冊の本『白痴』

91—92 私の古典

93—95 読者と作中人物

96—104 若者の哲学

105—121 ラムボオ素描

122—134 ニヒリズムとデカダンス

135—138 メフィストフェレスの能動性

139—141 モンテーニュとパスカル

142—164 ルクレツィア・ボルジア

165—167 二十世紀文学

168—174 二十世紀文学の未来

175—187 証人エレンブルグ

---

188—197 権力の国境

---

198—214 悲劇の肖像画

---

215—232 転換期における人間理性

---

233—255 自由とは何か

---

256—268 自閉の季節

---

269—283 宇宙のなかの人間

---

284—290 黒いランプ

---

291—300 埴谷雄高の「場所」——大江健三郎

---

301—315 解題——白川正芳

---

---

---

---

---

---

---

序詞——隕石

——  
《あまりに完璧な燃えがらとなつた

お前の不幸は

不吉な生物《変貌の魔》を

そこにのせたことだけに由来する。》

嘗て在つた生の燃えがらの不思議、

その巨大な意味をあまさず削りとられてしまつた

恐ろしいほど小さな、小さな、微小な部分。

燃えがらよ

暗黒にさからつて発光する

宇宙の秘密と

絶えず自身でない何者かになりゆかねばならない

事物の転変の

二つの原理のあいだに踏みまよつて

自身が自身である禁錮を苛らだちの裡にうちくだいたあまり

部分を全体に、そして、全体を部分に

変貌せしめてしまつた

不思議な、名状しがたい痕跡がそこにある。

燃えがらよ

燃えがらよ

いま在るものの来たるべきかたちの

孤独な、小さな予言者として横たわつている

燃えがらよ

——「文芸」三八年二月号

## ドストエフスキイと私

私は、どちらかといえば、はつきりした夜型で、自分でもしかと解らぬような漠とした物思いに耽りながら昼中ぼんやりした顔つきをして黙っているのに、夕方、黄色い灯がともつてあたりが薄闇のヴェールにつつまれてくると、自分でも不思議なほど魂の奥底から活気づいてきて、何かを話しはじめるともはや停まらなくなるのであつた。ほら、こいつがとめどなくしやべりはじめたぞ、と、私の父はまだ少年である私を奇妙なやつだといった、からかう眼つきで眺めながら、家族のものに知らせるのであつた。こいつがしやべりはじけると、もう夜になつたと解るから不思議だ……。

私は、ひるあんどん昼行燈、と父から名づけられるほどそこにいるのかいないのか解らぬような無音なぼんやりした存在であつたが、やや長じるにしたがつて活字の魅力を覚えると、その無音の傾向はいよいよ増大したらしい。後年、私の少年時代を見知っている年長の知人は、私がよく茂つた高い樹の上にのぼつて枝に腰かけたまま読書している姿を記憶しているといつて、すでに輪郭がぼやけかけている遠い時代の記憶のさまざまな部分を私に思い出させるきつかけをつくつてくれたが、その薄暗い記憶のいくつかの断片を脳裡の奥から拾い出してみると、身体を悪くするから外で遊べ、としじゆう言われていた私は、ひそかに押入れの中に隠れ蠟燭の黄色い光の輪を書物にあてながら長い時間読み耽つていて、夕方がきたのも知らないでいたことが幾度もあつた遠い事態に気づいた。そして、その古い記憶をやや仔細に調べてみると、年長の知人のもとに雑本ともいふべき多くの書物があつたという偶然によつて、私はほとんど少年時代特有の読みを飛び越えて大人

の読むものをいきなり手にしていたように思われる。小学生時代、すでに私は涙香のものをほとんど全部読み、そして逆に、中学生になつてからはじめて押川春浪を知つたが、いま考えても面白いことに、すでに涙香を読んでいた私は押川春浪のものをあまりに少年向きとしてほとんど受けつかなかつたのであつた。

ほんとうに解るのだろうか、と、大人の読み物を次々と熱心に読んでいる私の傍らでそうした言葉が、しばしば、つぶやかれたが、その読み物の世界へのめりこんでいる私は、ちやうど目の前に尽きせぬ興味のあつた風景がひらけてくる快速な乗り物にでも乗つているように、絶えず休むこともなく新しい読み物を撰取しつづけた。そして、そうした時期にひきつづいて、私は、偶然、ゴンチャロフの『オブローモフ』とレールモントフの『現代の英雄』とドストエフスキイの『白痴』をつづけて読んだのである。

それは私にとつて驚くべき新鮮な世界の存在を示す体験であつたといえる。一読して、それらの作品の世界がこれまで読み耽つていた読み物の世界とかけ離れてちがうことが感得された。面白いということの内容には、次から次へと頁をせわしく追つてゆく駆け足の筋の興味と、本から目を上げて眼前の空間をほんやり眺めながらゆつくり立ちどまつて味わうことのできる確然たる手応えのある深く広い世界の現存という事態のあることに気づかせられたのであつた。もつとも、まだ中学生である私は、まつたく新しい質の世界に直面して驚くべき発見を直感的に感じたものの、その広く深い世界へどれほどの程度まで意識的に踏みこみえたかは疑わしい。なぜなら、『白痴』のあとに『罪と罰』を読み、そしてまた、『カラマーゾフの兄弟』を読んだものの、『カラマーゾフの兄弟』を読みながら、いまになにか事件が起こるぞ、という展開の仕組みが厭味なメロドラマふうに感ぜられ、『白痴』を読んだときの甘美な感銘が『カラマーゾフの兄弟』にはついにそのとき覚えられなかつたからである。

この遠い滑稽な経験を振り返ると、確かに一つの作品との適切な出会いはある種のこちら側の体験の準備なしには不可能な場合があることが解るのである。『カラマーゾフの兄弟』や『悪霊』が私の精神のここかしこをやたらに触発して尽きせぬ興味をさそつたのは、ずっと後年、左翼運動のいくばくかの体験が私にで

きてからであつて、そのことはあとに述べることにするが、私のドストエフスキ耽溺の具合が二つのかけ離れた時期に分けられていることは、ドストエフスキの作品系列がいきなり踏みこみ可能なものと重苦しい人生体験に裏づけられた高い入場切符を必要とするものとの二つに分かれているのを物語っているがごとくである。

とはいえ、大まかにこういうものの、もちろん、『白痴』や『罪と罰』が踏みこみ可能な単純な作品とはいえないのであつて、ずつとあとに読み返してみれば、『罪と罰』における社会主義論や『白痴』におけるイッポリートの生彩ある告白の章などは、はじめはほとんど注意もはらわずに飛ばして読んでいたことに気づくのである。であるから、この私流の二つの分け方を敢えて行なうとすれば、『カラマーゾフの兄弟』や『悪霊』における重苦しい問題は直接読者に正面からぶつかるとき、一方、無縁な読者には退屈を覚えさせ、他方、共通体験があるいは共通主題を持つている読者にはすさまじい震撼をもたらすけれども、『白痴』や『罪と罰』における重苦しい箇所は読者の肩先をすりぬけて通つてしまうほど、その内容がより多くの興味ある物語性を持つているというふうに規定できるかもしれないのである。実際、はじめてオブローモフやベチャーリンやムイシュキンに接した中学生の読者たる私には、やつとオブローモフがランデヴーに出かけて行つた野原の無人の光景や、ベチャーリンが窓から見るコーカサスの遠い山岳地帯の印象的な風景や、ムイシュキンに声をかけてナスターシャの馬車が駆けすぎてゆく公園の木立ちの暗さなどが深い印象となつて刻印され、白昼、教室の隅で友達から離れてぼんやりしているときや家へ帰つて自分の部屋でひとりになるときなど、ふとその情景を思い出すだけで、すでにもう一度味わつたら一生忘れることのできない一種甘美酒に酔つたような気分になつてくるのであつた。換言すれば、青春の暗く甘美な気分にあちみちたロマンティックな陶酔的な味わいがそこから汲みとれるのであつて、そうした点では、『オブローモフ』も『現代の英雄』も『罪と罰』も『白痴』も一種暗い陰翳を帯びた青春小説ということができるのである。そして、ゴンチャロフもレールモントフもひきつづく作品を書かなかつたけれども、ひきつづいて暗い魂をいだいた

青年を主人公とするいくつかの作品を書いたドストエフスキイは、そのような暗く甘美な青春小説の限りもない宝庫となつていふというふうにもいえるかもしれない。秋の夕暮れ、這い寄つてくる薄闇の中に点火された淋しげな街燈を眺めているラスコーリニコフにも、マルメラードフの部屋から階段の途中まで追いかけてきた小さなポーレンカに、ロデオンのためにも祈つてくれというラスコーリニコフにも、また、朝の七時、大きな木が三本立つている傍らの公園の緑のベンチの上に眠つてしまつてゐるムイシュキンにも、同じ青春の暗い甘美な味わいが感ぜられるのである。まだ観念的な論議のすさまじい弁証法の味わいを知らなかつた少年期の私は、自分の抑圧された青春の暗い部分をそこにできるだけ甘美な形で反映させていたのであつたが、ドストエフスキイには、確かにそのような青春の詩とでもいふべき抒情の一面があるのである。

ところで、青年期に踏みこんだ私は、それから数年間、ドストエフスキイのみならず、文学作品からまつたく隔離されてゐるところの一種激しい渦動の時代を経たが、その数年間を経たのちの私がふたたびドストエフスキイを読んだとき、私は、いつてみれば、青年も壮年も老年も巧妙にひつくるめてみごとに組み合わせたとこの驚くべき巨大な論理に直面した。おそらく、ドストエフスキイのうむを言わせぬ根強い影響が私の上に及ぼされたのはこの時期からといつてもよいのであらうが、『悪霊』や『カラマーゾフの兄弟』は確かに私の魂の奥底を震撼して、その中のシガーレフ理論やキリーロフ理論や『大審問官』の章は何度読み返してもそのたびにこと新しく私の精神を熱く焼きたてるところの灼熱の鉄板と化してしまつたかのごとき感があつた。そしてそれまで暗く甘美な青春の書として少年の眼に映つた『罪と罰』や『白痴』においてもスヴィドリガロフやイッポリートのとき副人物が尽きせぬ興味の対象となりはじめ、私のドストエフスキイ耽溺はようやく回収不可能といつた耽溺にふさわしい新しい事態にはいりこんでゆきつつあるのであつた。

思い返してみると、それは私の生涯における置き換え不可能な特殊な時期なのであつた。私はそれまで閉じこめられていた灰色の壁の部屋から帰つて来たばかりであつたが、いまだになんらの職業にも就いていな

かつた。もつとも、その頃は、私の友達の多くも正式の職業を持たない不景気な時代で、家でぶらぶらしていることはなんら特殊な状態ではなかつたけれども、そのうちに、私の癒やしがたい持病となつた不眠症が昂じて夜と昼の生活が逆さまになると、それはもはや病的な匂いさえする特殊な時期となつたといえるのである。

私は曉方によりやく眠りはじめて、昼中、雨戸を閉ざしていたが、冬の短い日射しの季節になると、目覚めた私が雨戸をあけるときはもはや薄鼠色に暮れかかっている冬の寒い庭が眺められるのであつた。真夜中、一寸先も十尺先も同じな深い闇の中に眼を閉じたり開いたりしながら無限の闇についての空漠たる想念に耽つていると、遠からぬ井の頭公園に飼われている野禽の鋭い澄んだ叫びがすぐ間近かによく聞こえてきたものである。すると、私は起き上がつて真夜中の公園へ出かけてゆく習慣ができたのであつた。

その頃の井の頭公園は高い杉木立ちの密生した区画に大部分を占められていて、電燈はどこにも点いていなかったから道もさだかに解らぬ深い闇につつまれていたが、記憶の中の小さな道を進み、薄明かりに光つた池の面をたよりにその縁の軟らかな土質の道を私は歩いたのであつた。私は、その頃、『地下生活者の手記』について論じあう手紙をひとりの友達と往復していたが、その深夜の公園のひとり歩きこそ私にとつてペテルブルクの夜歩きのごとき意味を持つていたものだつたのである。私は密生した杉林の闇の中で誰にも会わなかつたけれども、誰もいないその深い闇の中で不意にぞつとする感覚を、しばしば、味わつたのであつて、通り魔と通常いわれるところの、その予期できぬ刺すような瞬間の背筋を走る感覚を味わいたいくだけの目的で、真夜中すぎの公園に私は出かけて行つたのであつた。その頃の私はドストエフスキに強く影響されていたけれども、より東方な私のほうがより非社会的で、そして、いわば実存的な意味で、より根源的、原始的なのであつた。

夜と昼が逆さまになつたその生活の中で、闇は絶えず顔をつきあわせているところの私の親密な時間になつた。闇という伴侶がなければまた私もないというぐらゐの不思議な緊密な相補関係が私たちのあいだにで